

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：土原一二 幹事：山上啓介

情報委員長：米沢修一

1981・4月2日

第187号

“心をむすぶ和菓子”

(株)森八 社長室長

根尾 外喜男 氏



私達が日頃口にするものは二つに大別される。一つは命を綱ぎ養っていくもの。一つは人の喜び、楽しみを深くするものである。その喜び、楽しみを与えてくれるものに和菓子がある。

日本の和菓子がかたち作られたのは奈良から平安の頃と考えられる。珍しい食べものを神殿に供え奉る神饌は食べものを通して神と人とが一体となることを意味するがこれは菓子の原形と言ってよい。又、祭りの中の直会（なおらい）という一種の会食は食べることで結ばれる重要な神事だが、祭りや祝事の晴れの日「品かわり」としてのこれら菓子も古くは料理の一つでもあった。

日本の風土から生まれた和菓子は生活の中で重要な働きをして来た。すべてが移ろいやすい中で人と人との心をつなぎとめ結びつけて来たのが和菓子である。

人の一生の中での和菓子とのかかわり、結婚、出産などその節目節目にお菓子や赤飯をたのむ風習は日本の心として今日も欠くべからざるものとして至っている。

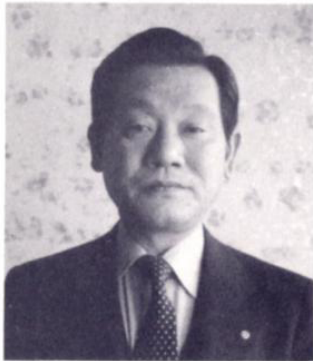
和菓子は五感の芸術と言われる。目に見た美しさ、食べた時の歯ざわり、舌ざわり、そしてさわやかな味と香りも大切である。四季それぞれの季節感の表現、琳派の絵画を思わせる多彩多型、さらに万葉集、物語、草紙などから因んだ和菓子の銘に至っては聴覚に対する日本人ならではの感がある。

生活の中から生れた和菓子は他人に対する感謝や喜びの表現であると同時に口では言えない心づかいでもある。

—映画「和」心を結ぶ和菓子(とらや製作)より— (文責 米沢修一)

私 の 名 刺

田 中 靖 康



此の度、浅田豊久様と館山松雄様よりの御推薦によりこの1月名誉ある金沢北ロータリークラブに入会を許されましたこと、心より感謝致して居ります。当クラブにあって、今後少しでも多くその精神に触れる様、努力・勉強致す所存です。どうぞ宜敷く御指導頂きます様お願い申し上げます。

私は、昭和8年2月に大阪に生を受け、小学生時代は、戦中で、空襲・学童疎開、そして終戦と類に漏れず悲惨でした。その上父の戦死といろいろな中で旧中学に2年半過しましたが、家計が苦しくなり、就学を断念せざるを得なくなりました。そうする中、私は、

昭和23年に寿屋（現サントリー株）に丁稚として入りました。（丁稚とは、云わば、見習社員のごとで、夜学に通い、洋服・靴・学用品・自転車・懐中電灯さらには、学費まで出して貰いました。）

昭和28年学校卒業後、正社員として配属され、本社・経理・販売・宣伝と経過し、

昭和43年、静岡営業所長。47年、関東支店次長。そして53年、金沢支店長として、金沢へ参りました。以上の様に、私の歩みは、即会社の歩みであった由です。それも決して順風満帆な、また平坦な道のりではありませんでした。詳すれば、赤玉ポートワインの製造・販売・破天荒で大担不敵とまでいわれたウイスキー事業への着手、さらに、その後の洋酒ブームがもたらした安穩で恵まれた時代に自ら縁を絶って進出したビール事業への挑戦など、砂漠に種を蒔き、水を灌ぎ、不毛の地を沃野に化する苦闘の連続でした。自らに課した試練とはいえ、急峻を登りつめてこられたのは、多くの幸運と、社内になぎる創業以来の“やってみなはれ”精神のたまもの以外の何ものでもありません。

さて厳しい80年代をむかえ、ロータリアンとして、その精神をインカネーション（肉化）し、自らのスコープ拡大のためにも、最大限努力してまいりたいつもりでございます。どうぞ、先輩の皆様方には、宜敷くご指導賜わります様、重ね重ね伏してお願い申し上げます。

歴代、国際ロータリー会長の指針

1968～69年度 東ヶ崎 潔（日本）

参加し敢行しよう！

1. 貴クラブにおいて。
2. 職業を通じて。
3. 地域社会づくりに。
4. 国際的接触を通じて。

修練委員会

ロータリー随想

文化思考

米沢 修一

—二つの文化概念—

「地域と文化」が問われている。文化の時代といわれたり、行政も文化行政などといっている。ここでいう文化とはいったい何か、少し考えてみよう。

私達日常の言葉の中で文化という語を気軽に使用している。その範囲は人間が生み出した最高の価値、たとえば芸術や科学から日常生活のごく一般的な品物までに使用されているごとくその意味は決して一様ではない。

しかし、大きく分けて見ると、ドイツ語でいう文化<クルトウール>と英語の<カルチャー>の二つに大別できよう。

前者は理想的、あるいは精神的な価値を対象として社会や地域との影響は受けはするが一応区別されたもの、具体的には宗教や芸術、さらに科学といった一つの独立した世界を指しているし、後者は人々の暮らし方や生き方をとらえる、言いかえれば生活文化としての考え方で充実した暮らしをするにはどうしたらよいかということである。その意味から今日私達が言う文化とは生活を全体として捉え、また見直すということであり、又それが今日的課題ではなからうか。

—地方の文化—

ところで我が国で文化ブームの契機となったのは4年前の文化産業論からである。それが引き金となり日本各地で華々しく「文化」について論議されるようになった。このように文化を一つの問題意識として出て来たその根底には我が国の工業化の進歩、近代化への急速な発展と大きく関わりをもっていると言われている。

工業化に伴う画一化の進行、統一を欠いた多様性の支配の中で人間としての潤いや、生きがいが失われていくのではないか、つまり人間性回復の問題が大きくクローズアップして来たということ言いかえればそれは生活の質の問題であり、快適で安定した生活、豊かな社会、ゆとりを追求することでないかと思う。

その意味において地方の時代、地方の文化は今までの地域とか文化の問いかけと、生活をトータル的に捉え直すということであろう。

文化は人々が生活の中でかたち創っていくとすれば、地域としての可能性を見出し確認していくことの積重ねがその地域の文化を創造していく源動力になると確信する。

—未来ある街づくり—

この様にして地方の文化的多様性が求められる中で、街づくりも「文化」を十分に考慮したものにななければならない。街づくりにおける諸問題は、産業・交通・景観・市民生活等々多岐多様にわたっている。しかし開発と地域文化の接点を見出し、地域の歴史、風土を踏まえたいうでの調和を計るべきである。

「住んでよい街」「住みたい街」づくりは地域の中でのいろいろな条件に立脚する街づくりの論理でなからうか。

—そして金沢は—

住んでよい街と同時に「訪れてみたい」街がいくつもある。ある調査でも京都と共に必ず金沢の名が出て来る。山紫水明、恵まれた環境下のわが街金沢は、四季折々の自然と調和の中で他の都市にない魅力、個性があるからだろう。又その魅力の内側には400年間の蓄積した伝統文化がある。それらが市民の美意識とか価値判断が生活の中で息づいているといえる。

近代化には伝統を断ち切った近代化と伝統を土台としての近代化があるとすれば、間違いなく金沢は後者でなくてはならない。

何を切り捨て何を創るのではなく、何をどの様に融和し、そこから何を見出すことが出来るかである。それを市民意識として夫々の立場において議論されることを願うものである。

